

# ほくしん子育て支援センターの3・11

安田 友理（福島県）

「ここは、げんぱつだよ!」…。お家で、ごっこ遊びをしていた2歳の男の子が、お母さんに言ったそうです。「大丈夫でしようか?」心配そうなお母さんの顔…。

子育て支援センターでは、お母さん方が気軽に職員に声をかけて下さいます。限られた時間のなかでも、本当に沢山のお話や相談をしてきましたが、3・11以降はその内容が一変しました。福島は今までの子育ての悩みに、長引く放射能問題への不安が加わり、未だかつて誰も経験したことのない、大変な子育てになっています。笑顔で遊ぶ子どもたち。一見、今までと変わりなく見える光景ですが、

「家では笑わないんです」と、悲しそうなお母さんが多くなりました。不安を抱えている大人たちの気持ちが伝わるのでしよう。お母さん方も、気持ちに余裕がなく大変な中、頑張つて支援センターへ子どもさんを連れてきてくれている…。センターの職員として、身が引き締まる思いでした。遊びを工夫し、楽しく遊ぶ事はもちろんですが、お家でもご家族と一緒に笑顔で遊ぶ事ができるよう、簡単な廃物利用の手作り玩具を紹介したり、一日一日を精一杯過ごしました。

すると、子どもたちの笑顔はお母さん方に伝わり、室内にはほっとした雰囲気

が漂います。「外へ出ることができない」毎日…。今までも、社会の影響で外遊びは減っていましたが、福島の子どもたちは3・11以降、長期間外出を制限されました。そのため、少しでも全身を動かすことができるよう、運動遊びや体操を多くしました。汗びっしょりになって、飽きずに遊ぶ様子に、子どもたちの無限のエネルギーを感じました。涙ぐむお母さん方もいました。

ここ福島市は、「盆地」という特性上、冬は「吾妻おろし」と呼ばれている吾妻連峰からの寒風にさらされ、夏は暑いという風土のためか、忍耐強い市民性があるようです。声高に訴えることはできないかもしれませんが、お母さん方が「子どもたちのために」、辛抱強く耐えてきた3・11からの日々を、言葉にできないほどの想いが詰まった日々を思うと、福島のお母さん方を愛おしく、そして誇りに

思います。

震災後は、保育園と子育て支援センター間の連携がより密になり、また研修会が多く行われました。そして、全国から「育ち」の各方面の専門家の方々が駆けつけて下さり、多くの学びがありました。多くの方々が見守り助けて下さっている、私たちは忘れられた存在ではないという安心感を持つことができました。3・11を「何が大切か」を考えるきっかけとし、いつも基本に立ち返り、未来ある子どもたちのために、これからも微力ながら親子が遊びを楽しむお手伝いをしていきたいと思えます。

